

『新柳情譜』

— 成島柳北の風流韻事 —

高橋 昭 男

一 成島柳北と『花月新誌』

成島柳北の名は、殆ど忘れ去られようとしている。そこでまず柳北の経歴を略記する。

天保八年（一八三七）代々將軍侍講を勤める旗本・成島稼堂の三男として生まれる。安政元年（一八五四）に將軍侍講見習。文久三年（一八六三）侍講免職。三年にわたる閉居の後、慶応元年（一八六五）歩兵頭並に返り咲き、慶応四年（一八六八）外国奉行から會計副総裁をもつて隠棲。明治四年（一八七一）浅草東本願寺学塾の学長。明治五～六年にかけて欧米視察。明治七年（一八七四）朝野新聞局長（後に社長）。コラムニストの草分けとして健筆を揮う。明治九年（一八七六）讒謗律及び新聞紙条例違反のことで入獄四ヶ月。明治十一年（一八七八）商法会議所議員。他に財界の要職に就く。明治十七年（一八八四）没。享年四十八歳。

前半は儒学者として、後半はジャーナリストとして生きた文人・柳北の生涯をかえりみると、日記や朝野新聞に掲載されたコラムを別にすれば、その著作は意外に少ない。柳北の死後、明治三十年

（一八九七）に博文館の『文芸倶楽部』臨時増刊として発行された『柳北全集』一冊をもって、その文業のほぼすべてを見ることができ（ただし漢詩は抄録）が、文人柳北の実像を知るには、明治十年（一八七七）一月より刊行された柳北主宰の雑誌『花月新誌』を通覧するのが、もっとも適当であろう。

『花月新誌』の基本データは次のようなものである。

○造本 タテ二十センチ、ヨコ十二センチ。和紙袋綴じ。本文九丁。表紙一丁。奥付一丁。活版。

○定価 四錢。十冊分の前金 三十六錢。三十冊分の前金 一円。

○発行回数と部数。明治十年一月の第一号から、十七年十一月の一五五号まで。月二～三回の発行であるが、後半は少なくなる。明治十四年の年間二三、七一四部がピーク。

○編集内容

① 詩文を中心とする。漢詩・漢文・和歌・擬古文

② 戯文・随筆

③ 海外の地理・風俗・文化の紹介

④ 翻訳物

⑤ 投稿（詩文）

具体的な編集内容を第一号で見てみよう。

花月新誌の引 川田甕江

題言 成島柳北（澤上漁史）

七福神圖の記（漢文） 菊池三溪 評 頼 支峯 山中静逸

漢詩 小野湖山 評 成島柳北 末廣鐵腸

漢詩 鱸 松塘 評 成島柳北 高橋愛山

漢詩 森 春濤 評 末廣鐵腸 成島柳北

漢詩 大沼枕山 評 成島柳北 桂川月池

漢詩 大槻磐溪 評 成島柳北

初夢歌合（和歌） 古川松根（肥前）

瘤鬼の言（随筆） 成島柳北（澤上漁史）

俳句 高島藍泉

柳橋新誌三編序 成島柳北（何有仙史） 評 川田甕江

執筆者を見ると、評者も含め当時の東京の漢詩壇のお歴々が勢揃いしており、とくに漢詩掲載の五人の大家对し、柳北は評を以て挨拶としている。これに京都から菊池三溪が参加しているが、発刊に際し「相謀り」計画したからである。柳北と三溪は古い付き合いで、柳北が侍講職を罷免されたときの後任が三溪であった。この執筆陣は『花月新誌』の主要メンバーとして、多少の出入りはあるにしても終刊まで踏襲された。在野の文人たちが中心となっているのは、柳北の風流韻事にかかわる見識であろう。

柳北にとつての風流韻事とは何か。澤上漁史名の「題言」に尽されていると見てよい。

花と云ふ、何ぞ必しも梅杏桃李を問はん。月と云ふ、何ぞ必しも朧望明魄を論ぜん。夫の紅樓解語の花。青衫筆端の花。亦是れ絶艶の人を動かすもの有り。才人方寸瑩々の月。静女奩台団々の月。亦是れ清輝の人を照すものに非ずや。然らば則四時各所何くに往くとして花月ならざらん。瓊筵以て開く可く、羽觴以て飛ばす可し。是れ花月新誌の作る所以なり。（中略）故に採録する所、亦唯だ余の好む所に従ふのみ。世の新誌を観閲する者。請ふ之を詩文集視すること莫れ。又之れを新聞紙視すること莫れ。道德家は之を諧謔と嘲り、輕嘆家は之を陳腐と罵るも、亦敢て顧慮する所に非ず。果して其の眞情趣を識らんとする者あらば、扁舟を墨江に棹さし、孤瓢を東台に提げ、往て花神と月娥とに問へ。

これを意識すればこうなる。

咲いている花ばかりが花ではない。月の満ち欠け、照る月曇る月、それだけが月ではなからう。美人のかんばせも、詩人がつむぎだす詩篇も、人の心を動かす花だ。詩人の詩魂に映る月もあれば、美女の化粧台の鏡も月の光を写す。花と月とを楽しむのに、時と場所を選ぶ必要があるうか。いつだって宴を開いてもかまわないし、大いに酒を飲もうではないか。風流を楽しむ

同好の士よ、気が向いたらこの小誌を手を取ってくれ。読めばわかるが、載せているのは皆、私の好みのものばかりだ。読者よ、たのむから小誌を詩文集と一緒にしないで欲しい。新聞の雑録欄とは中身が違うんだ。あいかわらずの戯れ言だとか、今さら古臭いだとか、言いたい奴には言わしておけ。私の本心を知りたいか。ならば大川に舟を浮かべて酒を酌みながら、花の精にでも、月の仙女にでも尋ねてみるがいい。

ここに、柳北は風流韻事を仲間内の楽しみから、雑誌メディアを通じて広汎な読者と共有するという、いわば風流韻事の近代化を試みるのである。ところで、森銑三翁は柳北のことをしばしば文章にしておられるが、『花月新誌』についての簡にして要を得た一文を紹介しよう。²⁾

『花月新誌』は殆ど柳北の個人雑誌の感があるが、漢文に、漢詩に狂詩に、仮字交りの戯文に、隨筆に、紀行に、正しく三面六臂の働きをして居り、卒然として書流されたやうなその文が実に洗練を極めてゐて、格調が高く、品格があつて、ふざけてゐるやうで、その裡に悲涼な響きの籠つてゐるものがあつて、それが人を惹きつける。柳北が一代の才人だつたことなど、今さらいはずもがなであるが、ジャアナリストとしても、実に得難い人だつたことを思はざるを得ぬ。そしてその書いてゐるものは何を読んでも今なほ清新で、少しも古めかしくなつていな

い。その点に敬意が払はれる。

『花月新誌』は明治十年代を代表する文芸雑誌として、江湖の広い支持を得ていた。当時の文芸雑誌としては、明治八年創刊の森春濤が主宰する漢詩文専門の『新文詩』があり、そこに掲載された漢詩人の多くが、政府高官系の詩人たちであった。一方には明治九年に創刊の服部撫松が主宰する『東京新誌』があり、幕末に大いにもてはやされた合巻と同じ中本仕立てで、戯作・奇譚・噂話などを、漢文で掲載した。

森銑三翁は、『花月新誌』こそは、わが国の文学雑誌の祖として認むべき³⁾としておられるが、漢詩文オンリーの高踏的な『新文誌』、俗受けをねらう『東京新誌』と、先行する二誌をにらみつつ柳北の目指したものは、ジャンルを限定せず、伝統を固守せず、作品の質を落さずに新時代にふさわしい上質な風流韻事の世界を紹介することであった。

二 風流韻事

柳北は二十歳ころから、花柳街に出遊をはじめ、この遊びは生涯尽きることがなかった。とくに柳橋の風情を愛し、柳橋花街の生態を活写した代表作の『柳橋新誌』⁴⁾を著わしているが、ほかにも明治七年、東本願寺編集局長として京都に在任していたおり、しばしば通った祇園の花街に材を取った『京猫一斑』⁵⁾を草している。その『京猫一斑』の京都の四条を描写したくだけで、要約すると次の

ように記している。

この世で無くてはならないものこそ文字である。文字の遊びというものは、そこに酒が入らなければ楽しむことができない。酒があれば次は妓女が来ること、今さら言うまでもなく、古今のこの道の達人は皆そう言っている。ただ酒と妓女だけでは、あまりにも平凡で俗っぽく、やはりまわりに勝れた山水の風景があつてこそ、酒と妓女の遊びがひとときは盛り上がるというものだ。四条という土地は、名妓と呼ばれる美女、芳醇な酒と旨いもの、山の秀景に清き流れと、三拍子そろつた世にも稀なる場所である。だからこそ、訪れる文人墨客は花鳥風詠の極楽郷に家に帰ることも忘れるほど没入してしまうのだ。

要するに柳北にとつての遊事とは、風流韻事の世界そのものであり、その場限りの欲楽に酔い痴れるだけでは成り立たないものだから、その欲びや楽しみを詩文に定着することによって完成する。ちなみに風流人とはどのようなものなのか。

すなわち真の「風流の人物」とは、「文采」「風騷」にすぐれたものでなければならぬ、ということになる。かくて風流の人物とは、

一 世の中の俗事・雑事にこだわらぬ、自由奔放でスケールの大きな人物。

二 世の中をつまらぬことは無視し、自由闊達に文学・芸術の世界や自然界に遊ぶ人物。

風流韻事という言葉は、ここから生れた。そして、男社会である過去の中国では「風流」の語義は女の世界へと更に拡大する。

三 世の中の俗事・雑事に関わらず、女にのめりこむ人物。女にうつつをぬかし、遊郭に流連る男。色男。色事師。

風は本来自由奔放、変幻自在、勝手気儘、すき放題である。そのことが英雄豪傑、文人墨客、そして色事師にたとえられたのであろう。⁽⁴⁾

柳北はこの三つの条件を十分に備えた「風流の人物」であった。

柳北が柳橋に出遊を始めたのは安政四年（一八五七）頃で、安政六年（一八五九）には、『柳橋新誌』初編の稿がなっており、万延元年（一八六〇）には初編の追補が成っている。『柳橋新誌』二編は明治四年（一八七一）の成稿である。柳北の遊び方は並大抵のものでなく、この初編の附録に記載された親友の柳河春三の回想（明治二年頃）によると、柳橋に落した金は二千両を下らないという。文久元年（一八六一）には、馴染の芸者お蝶を側室に置いているくらいである。したがって初編に描かれた柳橋の生態は精細を極め、後年、江戸文化を追慕する永井荷風をして、ある意味で花柳世界の「聖典」の書たらしめているのである。⁽⁵⁾

ところで、柳北が『柳橋新誌』を著わした動機のひとつとして、

中国・明末の文人余懷の『板橋雜記』がある。金陵（南京）郊外の花街・秦淮の名妓の列伝を中心に、当時の社会や情勢を回想した書で、わが国でも江戸時代中期、明和九年（一七七二）に和刻本が出版されている。異民族の清に蹂躪され滅ばされた明の文化への限り無い追憶が、いわば敗者の美学をかもしてわが国の文人たちを魅了したのである。柳北は初編の巻末に次のように述べている。

余曼（余懷）翁、金陵・珠市の名妓を列して、其の小伝を作り、佳人の跡、百世朽ちず。余今柳橋の紅裙を記して、以て之に準擬せんと欲す。而して未だ一個の行実記すべき者あるを詳らかにせず。乃ち徒らに聞く所の名、十の七八を、左に列するのみ。後の情痴余が如き者、若し其の事を索めて、其の伝を作つて、以て曼翁の拳に継がば、則ち一は以て脂粉の色をして長く朽ちざらしめ、一は以て斯の地の繁華を後日に徴むべき者あらん。

として、百二十余人の芸者の名前を列挙するにとどめている。『板橋雜記』は名妓の小伝あつての書であるのだが、「未だ一個の行実記すべき者あるを詳らかにせず」として、彼我の落差を認めるしかなかった。すなわち『柳橋新誌』においては、花街の生態を描ききっているものの、範とした『板橋雜記』にある妓女の小伝を欠くうらみを遺してしまった。この「筆債」を晩年に果たしたものが、『新柳情譜』初編・二編なのである。

三 『新柳情譜』の世界

『新柳情譜』の新柳とは新橋と柳橋、二橋の花街を意味し、情譜とは二つの花街の芸者の品評をしつつ、その系統をあらわしていることを示している。『花月新誌』第六十七号（明治十二年三月八日発行）から第九十号（明治十三年一月）まで二十四回にわたり連載されており、一回から十二回までが初編、十三回から二十四回までを二編とする。一回あたり二名の芸者を取り上げているが、初編は一回から六回まで新橋の芸者二名ずつ、七回から十二回までは柳橋の芸者二名ずつを品評し、二編は一回ごとに新橋一名、柳橋一名を紹介するという構成になっている。ちなみに、『花月新誌』第九十一号巻末の稟告には「新柳情譜第三編は小西湖佳話（箕作秋萍の連載随筆）の結尾を待て載せんとす」との予告が出ているが、その後、掲載されることはなかった。

初編、二編とも新橋十二名、柳橋十二名、あわせて二十四名が品評されているが、二十四という数字は、初編の末尾に柳北本人によつて説明されている。「余、斯の譜を編し、有名校書（芸者）を新柳二橋に選ぶ。各十二名。蓋し二十四番花信に比するなり」。二十四番花信とは、二十四節気の小寒から穀雨までの間の各気の開花を知らせる花便りのことで、通常は二十四番花信風とよばれる。小寒から穀雨までは八つの節気があり、一つの節気を三つの候に分けて八倍すると二十四候になる。これに花々をあてるのである。

小寒Ⅱ梅・椿・水仙 大寒Ⅱ沈丁花・蘭・山礬 立春Ⅱ黄梅・

桜桃・辛夷 雨水Ⅱ菜・杏・李 啓蟄Ⅱ桃・山吹・薔薇 春分

Ⅱ海棠・梨・木蘭 清明Ⅱ霧・麦・柳 穀雨Ⅱ牡丹・荼靡・棟

柳北は文久二年（一八六二）五月、柳河春三と「新撰柳橋二十四番花信」と題して、当時の柳橋の芸者二十四名を花々になぞらえて、洒落た一枚の摺り物にしており、おそらく友人知己に配ったのであろう。ただし、「新撰」とあるように、花の選び方は季節を無視して、菊、百日紅、あやめ、鳳仙花なども並べられ、これに芸者名をあてている。

ちなみに『花月新誌』に掲載されている柳北の連載ものを列挙すると次のようになる。

連載開始

「京猫一斑 鴨東新誌」 十八回（明治七年成稿） 二号明治十年

「小仙窟」（翻訳） 八回（成稿時未詳） 二十号明治十年

「澡泉紀遊」（紀行） 九回（書下ろし） 五十四号明治十一年

「新柳情譜」 二十四回（書下ろし） 六十七号明治十二年

「航薇日記」（紀行） 三十五回（明治二年成稿） 八十二号明治十二年

「航西日乗」（紀行） 二十回（明治六年成稿） 百十八号明治十四年

連載もので書下ろしは少ないなかで、『新柳情譜』の書下ろし連載二十四回は際立っている。柳北は満を持して執筆にあたったように見える。

ところで柳北のこの当時の動静はどうであったか。年譜を参考に

見てみたい。『花月新誌』が創刊された明治十年代、柳北が社長をつとめる『朝野新聞』は発行部数一万八千部にまで成長し、『花月新誌』の売り上げも好調で、明治前半のジャーナリズムにおける新聞・雑誌の二つのメディアで、柳北は押しも押されぬ盟主として君臨しており、生涯における絶頂期にあった。財界にも重きをなし、明治十二年七月には、来日した前アメリカ大統領グラントの接待委員をつとめている。明治十一年十月初め、柳北はかつて隠棲の栖としていた向島の「松菊荘」を建て直し、知名の士を招いて新築披露の宴を催した。

我が松菊荘の門牆は旧実^{もんぼう}に依る。門に入りて右すれば園に入る。左すれば厨^くに到る。中央は磚石^{たんせき}を列し、以て客を堂に延く。堂に面して梅数十株を栽え、尽く雑樹を外圍に移す。堂の左は翠松白桜若干株を排列し、下に蘭菊を点綴す。（中略）堂は小にして、楼は大也。客を延て馳眺^{ちちよう}款語^{かんご}し、且つ春日濕堤の花を望んで会飲せんと欲するなり。楼南は我が梅花に對し、東は我が桜花^{おうか}を揖^{ゆう}し、西と北とは遠く堤上の花を望む。命づけ四顧皆花楼と云ふ。⁽⁸⁾

澤上漁史・柳北にとって新装なった松菊荘は、風流韻事を楽しむ場としての理想郷であったが、柳北の外孫にあたる大島柳一氏によれば、「柳北は、家にあると訪客たえず、じつに、応接にいとまなかつたといふ⁽⁹⁾」とあって、どちらかと言えば、柳北の私的な社交場

と化してしまつたのである。柳北は多忙であつた。仕事や社交のみならず、文事に關けた名士ということから、原稿、揮毫、碑文の撰にいたるまで、依頼が引きも切らない状態となり、身動きがとれなほどであつたらしい。柳北は『花月新誌』第六十九号に載せた「閑忙小言」で次のように述べている。

漁史は記者なり。朝な夕な耳に聴き筆に写して片時の暇もなく、いと煩はしき身にこそあんなれ。されど己れ自らは文字の道に疎きも、只管歌読み詩作の事の好ましければ、斯く花月の一社を開きて忙中に閑を求めて、他人の金玉を輒め、本誌を綴る事とはなりにき。(中略) 試みに思へ、詩歌に役せらるゝも、文字に役せらるゝも、名利に役せらるゝも、其の役せらるゝ、や一なり。漁史は物に役せらるゝ、事の痛く嫌ひなれば、縦令風雅の道なりとも、人に迫るゝは好ましからず。斯く言はば漁史も月花にのみは役せらるゝも厭はずやと問ふ人有らん。漁史とても凡夫なり。月花に役せらるゝのみは免れ難しと心に悟りたれば、此事ばかりは有し給ひね。

「漁史とても凡夫なり。月花に役せらるゝは免れ難しと心に悟りたれば」と、心中を明かしている。「閑忙小言」が載つた『花月新誌』第六十九号の二号前の第六十七号から『新柳情譜』が連載されていることに注目しよう。しかも初編・二編併せて二十四回の連載が極めて短期間に終つていたのである。初編に関して言えば、十二

回目の最終回が同年七月三十日発行の七十八号であるから、わずか五ヶ月しかかかつていない。柳北は『新柳情譜』執筆にかなりの時間を費やし、『柳橋新誌』で成し得なかつた芸者の品評に全力を傾けたと思われる。

森銃三翁は「成島柳北と名妓たち^⑩」と題する文章で、次のように述べておられる。

「新柳情譜」は、成島柳北の著作中の第一に推すべきものだと思ふ。私は以前からさう極めてゐる。けれどもそれは『花月新誌』に連載されているだけで、博文館で版にした『柳北全集』にも収めてないものだから、柳北の著書として『柳橋新誌』や『京猫一斑』は読んでゐる人も、「新柳情譜」のことは存外知らない(中略)。全体で四十八人といふ多数の歌妓が取上げられてゐる。それにもかかはらず、その扱ひ方が変化の妙を極めてゐて、更に単調に陥らず、よく四十八人の四十八態を書き分けてゐるのであり、一読柳北ならではの感を深うする。しかもその四十八章には、七絶の一首づつが添へられてゐて、詩と文と相俟つて、余韻の尽きざるものがある。さうしてこの書は、繰返して読んで、飽くことを知らぬ好著となつてゐるのである。

『新柳情譜』は森銃三翁がこの文章を書かれた当時でも、世の人々から忘れ去られていた作品である。花柳街が全盛を極めるのは、明治以降、昭和の初めころまでで、永井荷風の一連の花柳小説もそ

れ以後は、舞台がカフェや玉ノ井ような私娼窟に変つていく。しかし、そうした時代風俗の変化よりも、忘れ去られる最大の要因は、漢文という文体にある。森翁がかほどまでにこの作品を称賛し、評価されたのは、「簡潔な漢文」であるからで、「仮名交じりに書き下ろしたりしては、原文の妙が減殺せられることとなり、地下の柳北を響登せしめることにならう」と嘆息しておられる。にもかかわらず、森翁が『新柳情譜』を紹介するにあたっては、仮名交じり文という「暴挙を取へて」するしかなかったたのである。しからば柳北の簡潔な漢文とはいかなるものか、初編第九回の錦八（柳橋）を、森翁にならない仮名交じり文で見してみよう。

新柳情譜

澤上漁史戯稿 秋風道人漫評

錦八（柳橋）

戊辰干戈の後、余、二三幕僚と、縦酒、懷を遣り、毎に飲するに妓を徴す。識る所、数十人。而して其の今に存する者、唯だ錦八一人のみ。当時、錦八、嬌小にして奇捷。酒を飲むことと数斗。酔へば則ち放言、人を罵る。勢ひ当るべからず。余、呼んで準姐と曰ふ。其の小にして鋭なるを以てなり。嘗て澤の魚十棧に飲む。余、愛狗有り。尾して来る。乃ち与ふるに肉を以てす。衆犬、皆な環視衆顧。然れども余を畏れて動かず。錦八既に酔ふ。曠りて曰く、「何ぞ偏なる」。手に盤肉を攫み、尽く衆犬に投界す。一坐皆な驚く。然れども錦八、志操も亦た

人に過ぐる者有るなり。深川の豪商、美濃善、錦八に昵し、竟に購ひて小星と為す。後、善の家道漸く衰へ、其の妻妾皆な棄て去る。錦八独り去らずして曰く、「旧恩豈に報ぜざるべけんや」と。乃ち復た籍を掲げ、技を售り以て善を養ふ。善、錦八に衣食する、三五年。竟に往く所を知らず。錦八、今猶ほ善く飲む。然れども、酔へば則ち大息して曰く、「妾、老ひたり。復た肉を攫み狗に投ずるの意氣無し」と。余、為に愀然たり。

一 一 一 一
一 一 一 一
一 一 一 一
一 一 一 一

評に云ふ。漁史、嘗て幕府の貴官為り。鞠躬盡瘁、蓋し亦た勞

せり。時勢一変、官を棄てて顧みず。放浪、自ら娯しむ。而して裁抑すべからずの氣有り。時に筆端に見る。則ち此の篇、豈に一歌妓の為に嘆きを発するのみならず。

〔欄外頭評〕

- ① 嬌小の二字、清新を描出す ② 酔妓の嬌曠の状、見るが如し ③ 肉を攫むの氣概、此れに見ゆ

毎回、「新柳情譜」の表題の下に、「澤上漁史戯稿」「秋風道人漫評」と記され、「錦八（柳橋）」のように、芸者名と花街名がある。

まず芸者の品評が記され、次に、品評を受けた七言絶句、そして品評と漢詩に対する評がある。いずれにも、返り点と送り仮名が施されている。そして欄外には頭評が載せられているが、これには返り点も、送り仮名も付けられていない。

品評と七言絶句は柳北（澤上漁史）の筆になる。品評には、芸者の来歴、容貌、性格、逸話などが書き分けられており、「戯稿」とへりくだってはいるが、本来、硬質である漢文体で、俗の世界に生きる花街の芸者の生態を、巧みな戯文に変換して読者を興味津津とさせる。まさに「簡潔な漢文」そのもので、しかもリズムカル、時に諧謔を交え、技巧のかぎりを尽している。ちなみに現代語に訳してみると、次のような文意になろう。

戊辰戦争が終り、ご一新の世になってから、私は幕臣であった数人の同僚と痛飲しては懐旧談にふけていた。飲むたびに芸者を呼んでいたから、名前だけで何十人も知っていた。それが今では錦八だけが生き残っている。その頃の錦八は小柄で色っぽく、すばしこいところがあった。飲めば斗酒なお辞せず、酔えば大声を出してわめき、罵声を浴びせ、その勢いたるや、手の付けようがなかった。私はハヤブサの錦八と仇名をつけた。小柄で敏捷なところがあつたからだ。その頃、隅田川沿いの魚十という料理屋に錦八を連れて行ったことがある。私の愛犬もついてきたので、肉を与えたのだが、まわりにいた野良犬どもは涎を垂らすだけでじっと見ている。私の顔色をうかがつて動

こうともしない。それを見た錦八は酔いにまかせて怒りだし、「何だい、おかしいじゃないか」と、皿に盛った肉を手づかみにして野良犬どもにも全部抛り投げた。そばにいた連中は驚きあされたのだが、これこそ錦八の心意気の人を上回るところなのだ。深川の豪商の美濃善が、錦八にぞつこん惚れ込んで身請けし、囲い者にした。その後、美濃善の家は没落し、妻妾すべて散り散りに去って行ったのだが、錦八だけは出て行かず、こう言つたという。「お世話になったからには、どうして旦那を抛っておけましようか」。そこで錦八は元にもどつて看板を掲げ、稼いだ金で美濃善を養つたそう。美濃善は錦八に厄介になること十五年、その後、行方知らずになつてしまった。錦八は今でもよく飲むが、酔えば溜息混じりにぼやいている。「あーあ、あたしも年をとつたよ、昔みたいに肉を引つつかんで犬に抛り投げるなんて、到底ムリな話さ」。私はそれを聞いて何とも寂しい思いをしたものだ。

現代語の文章になおすと、このように倍近くの字数が増え、仮名交じり文にしても、仮名分だけ字数が増えるわけであるから、「簡潔な漢文」の表現力の豊かさを実感せざるを得ない。それにしても柳北が愛してやまなかつた柳橋の往時を回顧しつつ、錦八という氣つ風のいい、義理と人情にあつい芸者の言動が活写されて、爽快感がみなぎる文章となつている。そして老いた錦八が酔つて漏らす繰り言に、柳北は「愀然」として杯を口に運んだことであろう。

こうした品評を受けた七言絶句には、柳北のこういう心境が詠われている。

ほんの一時の夢を見たように思っていたが、もう十有余年にもなる

酒を酌み交わし久闊を叙していても、何となく心寂しい

自分は鳥流しになったわけではないが

若かったころの事を思い出すと涙がにじんできて、もの悲しい糸の音に耳をかたむけるのだ

柳北の詩文に、評者は次のような感想を記す。

柳北君は、かつて幕府の上席の臣であり、粉骨碎身、その役目を奉じていた。ご一新となり、時の流れが大きく変ると、さつさと身を引き、未練もなしに浪人の気軽さを楽しんでいた。すなわち、人へつらわれないという気概があるのだ。それは文章を見れば分かる。つまり、この一篇は、ひとりの芸者の嘆き節を披露しているだけではないのだ。

柳北は江戸開城の前日、役を返上して向島須崎村の松菊荘に隠棲するが、三十歳を越したばかりの若さであった。絶句には、それから「十余年」経った明治十二年の柳北の心情が吐露されているが、ここに『板橋雑記』の影響を見ることができ、清に滅ぼされた明の遺臣・余懷が、南京・秦淮の歌妓の小伝を記しつつ、往時を追想

しているのが『板橋雑記』であることは、すでに述べたが、柳北にとつても幕臣を辞して隠棲してから十余年の歳月を閲して、はじめて過去を振り返る心境になり、『新柳情譜』を執筆したのではないかと推測される。

評者はさらに欄外に短い頭評をつける。ここでは文章表現のキイワードに対しての短評が付けられている。①若きころの錦八を「嬌小」と表現している事に注目し、「精神（生氣があふれていること）」を見事に描出したとする。②「錦八既に酔ふ。曠りて曰く。何ぞ偏なる」の描写に対し、酔った芸者が怒りまくっている様子が、まるで眼前にその情景を見ているようだと評する。③肉を引っつかんで野良犬に投げつける錦八の気迫ある行動を、「攫肉の気概、此れに見ゆ」として、錦八の心意気が表わされているとする。

このように、一人の芸者を、漢文・漢詩・漢文に依る評言・漢文による短評と四つの表現方法で構成し、品評した小伝が『新柳情譜』という作品である。

最後にひとつ気になるのは、秋風道人という評者は何者かということである。すなわち、秋風道人という雅号をもつ人物が見当たらないのである。『花月新誌』の同人の誰かが評者となっていると考えるのが妥当であるが、該当者がいない。短期間に書き下ろされた文章であるから、評者は柳北の身近なところにいる人物と見てよい。当時のことであるから、通信手段は今日とは大きな隔たりがあり、文章を遣り取りするにも、郵便事情はよくはなかったであろう。そこで身近な人物の筆頭として考えられるのは、朝野新聞の同僚であ

り、『花月新誌』にも参加して詩文にも関け、柳北とともに下獄したこともある末広鉄腸なのだが、比定はできない。となると、評者は柳北本人ではないかと思えてくるのである。

実は『花月新誌』の第二十二号から連載がはじまる「新橋佳話」という花柳小説があり、筆者は「秋風道人 編」とあり評者は「半醉居士 評」となっている。「新橋佳話」は新橋花街の芸者・鶴児と客筋の三人の官員の物語で、花街における恋の達引きが描かれた江戸時代の人情本の系統の作品である。初編と二編があるが、二編は第四十三号をもって中断されている。それにしても二十四回にわたる長い連載をもたされた人物とは誰なのであろう。新橋花街の生態が詳細に描写されていることから、秋風道人＝柳北という考えが棄てきれない。もうひとつ「秋風道人 編」とある「七湯清話」という連載が第五十三号から第五十八号まであり、箱根を中心とする温泉随筆である。柳北は大の温泉好きであった。「深泉紀遊」という、これも箱根周辺の温泉廻りの紀行文を、遷上漁史名で第五十四号から第六十一号まで連載している。第五十四号から第五十八号まで、二つの温泉ものが同時掲載されているが、箱根や熱海の温泉に通い詰めた柳北なら、二本立ての温泉ものを連載することなど、造作のないことであつたらう。

ひとりの人物がペンネームを使い分けて、同一の誌面に掲載することは、この当時しばしば行なわれている。少し時代は下がるが、大正二年（一九一三）から発行された『郷土研究』という民俗学の雑誌は、二年後からは柳田国男が一人で編集し、多いときには十通

り以上の名前を使い分けて執筆したといわれている⁽¹²⁾。

四 おわりに

『新柳情譜』についての解説を試みたのだが、この作品が現代の我々に受け入れられるものであるのか、軽々には言えない。筆者は『成蹊人文研究』第二十三号に、『新柳情譜』初編註釈を掲載するにあたり、この作品を精読してみたが、かなり難解な部分もあつて、揖斐高先生の多大なご助言をいただいた。そのため一応の体裁は整えることができたが、何分にも特殊な花街という世界を題材とした作品でもあり、また漢文読解力の不足もあつて、意に満たぬ箇所も多々ある。しかし、森銚三翁の言われた「簡潔な漢文」の魅力には、ある程度接近できたものと思われる。なお、本作のテキストはきわめて入手しにくい。『花月新誌』原本か、昭和四十六年（一九七二）に肥田皓三氏が手がけた『新柳情譜』のみの復刻版の小冊子、そしてゆまに書房の『花月新誌』復刻版のみである。

注1 「西京の菊池三溪翁と相謀り、諸大家の文章詩歌其の他面白き物を選んで編集し、来年の一月四日より弊社にて売出し候ま、御虫履願ひ升。明治九年十一月二十五日発行の『朝野新聞』紙上の予告記事。

- 2 『森銚三著作集』続編第九卷「書物」雑誌四三三頁 中央公論社一九九三
- 3 前掲書第五卷「成島柳北」一六七頁
- 4 一海知義『風・一語の辞典』四六・四七・四八頁 三省堂一九九六
- 5 『荷風全集』第十六卷「柳橋新誌につきて」二八三頁 岩波書店一九六四
- 6 『前田愛著作集』第一卷「板橋雜記」と「柳橋新誌」四九一頁 筑摩書房一九八九

- 7 早稲田大学古典籍総合データベース「新撰柳橋二十四番花信」
『柳北全集』「松菊荘の略記」二十頁 博文館一八九七
- 8 大島柳一『柳北談叢』一八四頁 昭和刊行会一九四三
- 9 『森統三著作集』統編第五卷「成島柳北と名妓たち」一七五頁
- 10 前掲書同項一七六頁
- 11 「柳田が『郷土研究』誌上で、数多くの筆名を使用したことは周知のことであり、ことに最終号では十四の筆名を駆使し、一冊分全部を一人で書きあげたことは有名である」。柳田國男研究会『柳田國男伝』四七七頁
- 12 三一書房一九八八

(たかはし・あきお 大学院博士後期課程在学)